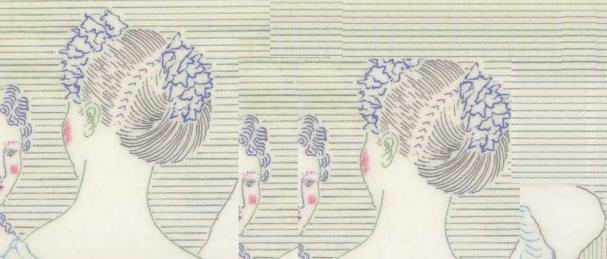


私の好きな あの人のコト

斉藤由貴



新潮社

私の好きな あの人のコト

斉藤由貴



新潮社

斉藤由貴（さいとう・ゆき）

1966年横浜生まれ。'86年「雪の断章—情熱—」で映画初出演を果たし、以後、多数の映画、ドラマ、舞台で女優として活躍する一方、歌手、作家としての顔も持つ。
'94年に結婚、'99年には長女を出産。

わたし　　す　　　　　ひと
私の好きなあの人のコト

2000年11月20日発行

【著　者】 さいとう ゆ き
斉藤由貴

【発行者】 佐藤隆信

【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71

電話 編集部(03)3266-5646 読者係(03)3266-5111

【印　刷】 大日本印刷株式会社

【製　本】 大日製本印刷株式会社



©Yuki Saito 2000, Printed in Japan

JASRAC 出0012694-001

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。
価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-441301-1 C0095

私の好きなあの人のコト＊目次

まえがきにかえて 7

母について 11

ミス楠田の疲れ顔 17

一体なんなんだ、君は 23

放浪の吟遊詩人 29

幸せを掴む才能 35

新世代のお嬢様女優 41

“もう一回”の向こう側 47

微笑みながら消えていく 53

“石の精霊” 59

どうにも止まらない 65

ベスト・フレンド 71

インサイド・アウトな女たち 77

“ヘプバーン”と“アン王女” 83

天使の声をもつ人 90

トリイという人 96

横浜生まれの永遠の少女 102

口説かれちゃったのよ 108

七変化の努力家 114

フォーエバー・ワル 120

これが私、タチの生きる道

126

どーしてそんなにカッチョイイんですか

132

大好きな天国の二人へ

138

ホンモノの女優

144

父という人

150

私の好きなあの人のコト

156

マネージャー

161

「愛の告白」

167

あとがき

179

私の好きなあの人のコト

まえがきにかえて

私は今たかいたかい空の上において、ものすごい速度で日本方面に向かっている。私の座っているところは滅茶苦茶乾いている事を除けば大概快適だが、左右の鉄の壁の向こう側はきつと想像を絶する寒さで、それを思うとなんだか少し恐い気もするが、でも大きな恐怖ではない。飛行機は、私にはそれ程脅威ではないのだ。

今回はテレビのドキュメンタリー番組の撮影の為、二週間程オーストリアに滞在し、ヨーロッパをトレッキングしたのだが、その間私はこれ迄の人生の分全てと同じ位、という和大ゲサに聞こえるかもしれないが、とにかくかなりの濃度で恐怖と、或いは自分の恐怖心と向き合うことになった。

トレッキング、をやるといふ事はわかったがその実トレッキングがハイキングとどう違うのかさえよく知らぬまま往路の飛行機に呑気にのっていた私だったが、実際、始めてみるとこれはとんでもないものを引き受けてしまった、と心の中で青くなった。以前、テレビでスキー滑降を見ていたのと、自分がスキー場に行った時とでは斜面の角度の印象が全然違っていて、スキー板をはめたまま呆然としてしまい、このままリフトに乗って帰ろっかなーと思ったことを覚えているが、トレッキングする山の印象も同じようなものがあつた。ただ歩いてゆくだけと

言えはそうなのだが、ものすごく道が狭いうえ、ざらざらと小石が転がっていたりぬかるんだったり突然何も道らしきもののない岩場にでたりと、足許は殆んど定かでない。しかも片側はかなり（私から見ればですが）きりたった崖で、落ちたら一体どこまで転がっていつちゃうのだろうという感じである。時にはここを通ってくれるなといわんばかりにせり出した岩のところに無理矢理打ちつけられたぐに張られたロープにしがみつき、リンボーダンスのような姿勢で必死になって（正に必死だ！）渡っていかねければならなかったりする。しかも、長時間（というか朝から晩迄）歩くので、二日目からは強烈な筋肉痛も加わった。のぼりはいいのだが、そういう歩きにくい山道を長時間下ると、たとえストックをつかっているも足、特に太ももや膝にかかる負担は相当なものがある。恥ずかしながら日頃の運動不足もたたって、階段を降りるのさえおぼつかなくなってしまった。

そういうわけで、足許が危なくて恐い、足が痛くてうまく歩けず恐い、おまけに柵がない（実は私は柵がない事が人一倍恐いのだ）状態で、長時間「落ちて死んでしまったらどうしよう」という緊張感と恐怖感に耐えることとなった。

正直、私は自分がこんなに恐がりだとは思わなかった。というか、いつからこんなに恐がりになってしまったのかと思う。確か、昔はこんなではなかった。結構コワイ事でも割と平気で、というか何も考えずにやってしまっていたのだ。

そう、言ってみれば、私は最近、「考える」ようになっていた。自分の死や、危険なこと、絶対に失ってはいけないものについて。私は決して死ぬわけにいかない、という決意が現実味を帯びてきてから、同時に恐怖心も現実的になったのだ。

その全てのもとは、多分、娘にある。何も知らず、自分の側にいる人間がどうして突然かわつちやつたのかもよくわからず、日本の地でただ自分にできる精一杯すくすく育てている娘を想うと、心底、死が恐怖に思える。と同時に、こんなにも「誰かを失いたくない、離れたくない」とある種の執着を持ってしまった自分にも恐怖を覚えてしまう。

人と人とのつながりは、不思議なものだ。私にとってそれは伸びたり縮んだり、拡がったりしぼんだり、目に見えはしないけれど、刻一刻と変化してゆく。その変容は私を期待させたりがっかりさせたりいろいろ忙しいのだけれど、決して退屈させることはないようだ。関わり如何によつては私を向上させてくれたり、ダメにしてしまったり、大切なものであると同時に危険なものでもあるが、とにかく私はその中に生きている。そして自分の命が失われることを恐怖に感じてしまう程大切な「人間」がこの世にできてしまった今を、不思議な感動をもつて受けとめている。

一九九七年から一九九九年迄、短いようで長く続いたような気もするが、小説新潮での連載は自分自身を振り返るいいチャンスにもなりました。そして、うまく言えないけれど、読み返す度、こんなに素敵な人が私のまわりにいっぱいいてくれる、と改めて知ることが、

「あなたは一人じゃないんだから頑張つて生きなさいよ」

と、いう励ましになったりするのです。

読んで下さる皆さんが、

「へえ——この人にはこんな一面もあるんだ」

とか、

“斉藤由貴のまわりにはこんな人がいるんだ……”
と、楽しんで下さったら、嬉しいです。

それでは又、後程……。

母について

自慢じゃないが私は今とても緊張している。の、つけ、からなんだが、私は今迄“文芸誌”なるものに原稿を書いたことがない（と思う）。ましてや、連載なんて初めての初めてなので、よけいに固くなってしまっている。正直、原稿依頼を受けた時は何故私に、とても驚いた。この十年近く、数え切れない程の原稿を書いてきたが、いつもいつも心の中に“私が有名人だから原稿をたのまれるのだ”という幾許かの思いがつきまとっていたし、それはあながち思い込みだけとは言えなかったと思う。けれどここ最近、ごく最近だがようやく“私の文章を評価してくれているのかもしれない”と思え始め、この小説新潮での連載を依頼されるに至って、やっと、“ああ、私は文章を書く人間なんだ”という自覚のようなものが、私の身体の中に、まだ殻の柔らかいタマゴみたいだが形成されてきた気がする。そんなわけで、これから一年か二年かまだわからないけども、どうぞおつきあい下さい。よろしく願います。

で、交遊録である。

初めに、何をテーマに連載を進めてゆくかという打ち合わせを担当の編集の方としていて、交遊録というのが出た時に、何かすんなりと、“ア、いいな”と思った。何故かというと、私

は自慢じゃないが友人が少ない。広く浅くつきあうということが出来ない。だからといって狭く深くというわけでもない。そこまで仲良くなれている自信もない。はつきりいつて人づきあいが下手である。これはきつと何かしら性格がまずいんだらうと思うが自分が把握できてないのでうまくおせない。それなのに、そんな私が交遊録を書くなんて、如何にも無理があつてイイではないか。きつと最後の方はアイディアを切らして、息もきらして、苦しまぎれに変なことを思いつくに違いないのだ。その日を楽しみに、私はこの連載を始めたいと思う。

で、母である。

自己紹介をも兼ねて交遊録（この場合交遊とはちよつと違うが）を書くとなるとこの人しか思い至らなかつたので、今回は母について書いてみたい。私の人生の最初を作った人の一人であり、一番多く言葉を交わしただらう人だからだ（大概の例に洩れず、父とはそんなに話をしない娘だつた。父も無口だし）。しかも私は二十六で友だちと二人暮らしをはじめた迄、かなり長いこと、別のイミで親のスネをかじって生きてきたことになる。

私は四人兄弟の三番目だつた。その当時でも四人兄弟というケッコウ多産な家、という言われ方をしていたように思う。姉、兄、弟といて、子育てはかなり大変だつたのではと思うが、母自身が大勢の兄弟姉妹の中で育つたので、元来にぎやかなのが好きなのかもしれない。母の両親は二人ともろうあ者で、幼い頃は裕福な家庭に育つたらしいが、結婚し、第二次世界大戦に突入してからはかなり経済的に逼迫した状態にあつたらしい。まアもつともその当時は多くの家庭がそうだつたと思うが、それにしてもやはり身体障害者に対する風あたりは強く、今の

ように福祉だ平等雇用だなどといえる余裕のある御時世でもなく、母の実家はかなり苦しかったようだ。学歴も中学卒迄がやっと、修学旅行にいくお金など積み立てられる筈もなく、ガランとした教室で三日間、先生と向きあって勉強して過ごしたという。一番上の姉は養女に出されたので、ある意味では長女のようにして口のきけない、耳の聞こえない両親と社会のバイパスとして、又ある時はいわれなき差別から両親を守る壁としてがんばって来た母は、強く明るく生きる姿勢を盾に、大人になったようだ。実際私の知っている母は、強く、スツトボけていて、とにかく明るい。父がまたものすごく真面目で直情型で、「思い込んだら」の人の人なので、そのあっけらかんぶりは余計に目立つ。実際うちの両親は全くといっていい程正反對の性格なので、よく口論になるのだが、「大体君は……」と父が言いだすと最後の最後迄フンフンと黙って聞いていて、話の終わりに、「ホント、そうよねえ」と言って話をしめくくるのが母である。勿論精神的に余裕のあるレベルの話し合いの時のことだろうが、この話は、この夫婦のいろいろな事を象徴している気がする。

そんな二人の間に育った私達である。それぞれ個性的だったが主に上の二人は優等生で、下の二人は問題児だったように思う（表面的には）。私は学校になじまず遅刻早退欠席の王者だったし、弟はバンドをやっていて前髪を水色にしたり緑にしたりしていた。私は一度冬の雪の日 ツルツルに凍った坂道をどーしても登れずに登校を断念して以来、雨の日や雪の日や（時には風の日も）無理して学校に行こうとしなくなった。雪だから休むと母に告げると、

「そうね、危ないもんね、いいわよ無理しなくて」
とニッコリ笑った。

我が家のバクダンだと父に言わしめた私の「思春期」の「多感期」の「反抗期」は並じやなく、理由もなくイライラし食事の途中に突然泣き出して席を立ったり、わけのわからない行動ばかりだったが、母はそんな私に決して負けなかった。ある日、原因はもう雲のかなただが多分些細なことに決まってる、ともかく私は怒ってぎゃあぎゃあ母にかみついて、終いにこう怒鳴った。

「お母さんなんか大っ嫌い」

すると母は、はつきりとした声でこう言い返して来た。

「あらそう、でもあたしはあなたのこと大好き」

言うまでもなくこの言葉は私の怒りの炎に油を注いだ。ここで大事なものは、母がホームドラママチックに聖母のような悟った笑顔で私にこの言葉を吐いたわけではなく、へーんだという感じで開き直って言い放ったところだ。後で聞いたところによると、母はこの時期の私に正直かなり手こずっていたらしい。私の言動に対してほとほと手を焼き、ムカッ腹も立てていたらしいが、それで極めつけに口から出たセリフがこれなのだから、げに恐ろしきは母親なり、である。それからもう一つ大事なのは、この出来事を、想像を絶する程記憶力の悪い私が今に至るまで克明に憶えているということである。私は仕事を始めてしばらくした頃、NHKの食堂で事務所のマネージャーさんに逢って挨拶したのはいいが、それがどこの誰だかわからなかったことがあった位物覚えが悪い。それなのに、あの、まさにいわれなき、エゴイズムのかたまりのような勝手な怒りの中で、私の大脳皮質はその出来事を将来、十五年後小説新潮の原稿に書きとめるべく一番具合のいいトコロにインプットしていたのだ。これはもう、自然の驚異とい